



|                     |                                                                                                         |
|---------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Title               | 日中両語の音節長の特徴と効率的な日本語発話の基盤形成：中国語母語話者による適切なCV音節長とその定着 [論文内容及び審査の要旨]                                        |
| Author(s)           | 藤田, 守                                                                                                   |
| Degree Grantor      | 北海道大学                                                                                                   |
| Degree Name         | 博士(国際広報メディア)                                                                                            |
| Dissertation Number | 甲第16039号                                                                                                |
| Issue Date          | 2024-06-28                                                                                              |
| Doc URL             | <a href="https://hdl.handle.net/2115/92797">https://hdl.handle.net/2115/92797</a>                       |
| Rights(URL)         | <a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a> |
| Type                | doctoral thesis                                                                                         |
| File Information    | FUJITA_Mamoru_review.pdf, 審査の要旨                                                                         |



## 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：藤田 守

|      |    |      |       |
|------|----|------|-------|
| 審査委員 | 主査 | 特任教授 | 河 合 靖 |
|      | 副査 | 教授   | 奥 聡   |
|      | 副査 | 准教授  | 田 邊 鉄 |

## 学位論文題名

日中両語の音節長の特徴と効率的な日本語発話の基盤形成

—中国語母語話者による適切な CV 音節長とその定着—

本研究は、中国語母語話者の日本語学習者（CNJ）を対象に、中国語の音声的特徴を利用しながら日本語の発話指導を行い、その効果の検証を試みた、日本語の音声教育における応用言語学研究である。当該研究分野では、CNJ が日本語を学習する際に、単音の音節長が日本語母語話者（JN）より長く発音する傾向があることを、観察による知見として長く指摘してきている。しかし、日本語教育の音声指導では、主に特殊拍に焦点が集まりがちで、単音については時間をかけて練習量を増やすことで自然に JN の発話に近づくと考える傾向が強かったと言える。著者は、単音の認知・産出ができなければ特殊拍の習得にも支障が出るはずであること、単音の長い音節長の影響で学習時に処理できる言語材料が少なくなり、学習項目の理解や記憶に不利であることなどの問題点を挙げている。

本研究では、中国語の軽声が日本語単音の音節長に近いことを利用して教育介入を行い、学習の早い段階で CNJ の単音の音節長を JN に近づけることによって、日本語発話の基盤を形成することができると主張している。まず、これまで観察によって唱えられてきた、CNJ の日本語発話における母音・子音の組み合わせによる単音の音節長（CV 音節長）が JN より長いことを、実証的に確認した。CNJ の CV 音節長は概ね 200msec. 以上であり、日本語の長音に近かった。つぎに、中国語の軽声が日本語の CV 音節長に近いことを CNJ に気づきとして与える指導を行ったあと、1～2 音節の無意味語を含んだ日本語発話を収集し、JN との比較を行った。指導前に見られた CNJ の長い CV 音節長は、指導後に改善が見られた。最後に、上記で行った指導を思い出すように指示するが、内語反復や口慣らしは強制せず学習者の自由とし、3～4 音節の無意味語を含んだ日本語発話を収集し、JN との比較を行った。CNJ と JN の間に、CV 音節長の有意な差は見られず、著者は、教育介入によって形

成された日本語発話の基盤としての CV 音節長が定着していることを示唆すると主張している。

口頭試問は 2024 年 3 月 28 日 10 時から約 1 時間 30 分にわたって行われた。まず、博士論文提出者が約 25 分間論文の内容について発表を行った。次に、審査委員との間で研究の意義、新規性、方法論などの観点から約 35 分間の質疑応答が行われた。その後、約 30 分間審査委員のみで本論文の審査を行った。

口頭試問では、本研究の教育介入に関する独自性、軽声の連続に対する学習者の反応、研究参加者が同じ出身地となっている理由およびその妥当性、実験遂行に際して学習内容の統制の状況、論文の記述の統一性・冗長さおよび用語の選定、データ収集に利用した無意味語のアクセント型、中国語教育に対する研究成果の還元方法、音声的特徴と意味の関係、当該分野の教育実践者の受容態度の予測とその理由などの点について質疑応答が行われた。著者からは真摯かつ誠実な態度で回答がなされ、その内容も概ね適切で妥当であった。質疑応答を通して、著者の当該分野に対する熱意が感じられ、博士論文口頭試問として十分な水準であったと判断される。

質疑応答の後、著者本人及び参加者が退出し、審査委員のみによる審査を実施した。審査委員は、次の 3 点で本論文を高く評価し、その意義を認めると判断した。まず、第一に、本研究で CNJ と JN の日本語 CV 音節長の違いを丁寧なデータ収集と丹念な分析を通して実証的に確認した点に新規性が認められる。また、無意味語を日本語発話に埋め込んでデータ収集することで具体的な場面で抽象的概念を分析したことは、研究方法の上で評価に値する。第二に、中国語の音声的特徴を利用して日本語の音声指導を行う教育介入を提案した点に独自性があり、教育実践に対する影響も大きいと判断する。第三に、この教育介入は、学習者の母語と目標言語の共通な要素を見つけてそれを利用するという一般的方法論として評価したときに、異なる体系、組織、制度が理由で理解や融合に問題が生じている現象を解決する際に発想の転換を促すと予測される。応用言語学のみならず多方面に影響をもたらす可能性が期待される。

一方、問題点としては、記述に冗漫さが残り読み手意識の欠如が見られること、用語の選定にさらなる精緻さが期待されること、研究参加者が量的にも質的にも限定的であるので一般化に難があること、統制群を設けるなど実験研究としてはさらに改善が可能であることなどが挙げられる。このような問題は残されているものの、応用言語学研究の当該分野に大きな指針と影響を与える研究であることは明らかであり、本論文は学術的にも社会的にも高い意義を持つ。よって、審査委員会では本論文を、博士（国際広報メディア）の学位を授与される資格があるものと判断した。